

1. 信仰に生きるキリストの弟子の養成

主の弟子は状況に左右されず聖霊に聞き従い、神を信じ人を信じて人々の救いと解放をもたらす。十字架に死んで神と共に生きるとは、自分と人々の罪からくる咎を覚悟し信仰と希望と愛とを持って福音の祝福の中に生きることである。キリストの弟子の養成こそ教会の使命である。

2. 真理と祈りと讚美に満ちた信仰生活の指導

聖書の教え、真理は人を自由にする。祈りは問題や悩みを解決し、神の御心を確認する。讚美は癒しと喜びと力を与える。教会はそれらを教え指導し、互いの交わりの中で模範を造り出していく。

3. キリストを頭として愛によって結び合わされた共同体の形成

教会には多種多様な人々が神によってこの世から召し出されてくる。この信者を整え、神への奉仕という使命を果たすように導くには、キリストの弟子として十字架を負い主に従う指導者層が確立されなければならない。整えられ愛し合い一致した教会こそ神の栄光が現され成長する。

4. 隣人に対する愛に基づいた執り成しと伝道の実践

神を愛する人は人をも愛し、行いを伴う信仰を持つ。真理を知らず罪と咎によって苦しんでいる人々を愛し、執り成し、福音を伝えることによってこそクリスチャンは成長し、祝福される。

5. 地域と社会に貢献する魅力的な教会員の歩みと家族形成

教会と教会員の活動・事業・啓発運動を展開し、社会に影響を与えながら、同時に愛し合う家族を形成し、接する人々に福音を現していくことが、日本のリバイバルに必要であると私たちは信じる。

今週の聖書

ヘブル

10:36 あなたがたが神のみこころを行って、約束のものを手に入れるために必要なのは忍耐です。

10:37 「もししばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。

10:38 わたしの義人は信仰によって生きる。もし、恐れ退くなら、わたしのころは彼を喜ばない。」

10:39 私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。

11:1 信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

11:2 昔の人々はこの信仰によって称賛されました。

11:3 信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

Heb

10:36 For you have need of endurance, so that after you have done the will of God, you may receive the promise:

10:37 "For yet a little while, And He who is coming will come and will not tarry.

10:38 Now the just shall live by faith; But if anyone draws back, My soul has no pleasure in him."

10:39 But we are not of those who draw back to perdition, but of those who believe to the saving of the soul.

11:1 Now faith is the substance of things hoped for, the evidence of things not seen.

11:2 For by it the elders obtained a good testimony.

11:3 By faith we understand that the worlds were framed by the word of God, so that the things which are seen were not made of things which are visible.

「信仰によって生きる。」 ヘブル書10章36～11章3節

「義人は信仰によって生きる。」(10・38)。このヘブル書の聖句は、信仰によって生き抜く人を義人という、と教えます。その逆が、「恐れ退く」ことであって、それは「滅びる者」となってしまうからです。

日々の歩みは、信仰者でなくても、信じる必要があります。しかし、その信じる基になっているものが不安定です。多くの場合に「努力」、「能力」、「経済力」、「健康体力」です。それらは、自分の側にあり、間違いないと自己中心の罪は思い込ませるのですが、そうすると他の人とのつながりや組織よりも自分だけの意識に向けさせて孤立していきます。最近の殺傷事件を起こしている人々は、そのようです。頼りにしていたものが破綻すると「滅びる者」になってしまふのです。

「信仰によって生きる。」とは、自分の都合の良い人生を信じて生きるのではありません。神にそういうことを期待して信仰を持っていると考える人は、やはりうまくいかないかと破綻します。

「信じていのちを保つ者です。」(39)とは、うまく行くことが行くまいが、「神がご自身の差配と判断の中で世界を営まれており、自分は神のみ旨に従って生きる」ことを決心して神に繋がっているというところによって「いのちを保つ」のです。そういう面で、何が起ころうとも、何が予想されようとも、神の人として万全に備えて信じて、歩みを変えないことが肝要です。

「まことしやかな議論によって、あなたがたをあやまちに導く」(コロサイ2・8) 誘惑が多く、知識や理性は、信仰を危うくします。信仰は、聖書に基づいた論理的生活を必要としますが、知性や理性はこの世の論理に基づいた生き方を要求するのです。ところが、それは自己中心な人しか達成しえない卓上の産物であり、人を批判的攻撃的にします。また、神を信じて生きるとは、自分の能力を信じることではないので、論理的生活ができなくても問題ないのです。

私たち夫婦の愛唱歌は「歌いつつ歩まん」(聖歌498)です。作詞したエリザ・ヒューイットは養護学校の教師になります。赴任した学校に、知恵遅れの男の子がいて、彼が暴れて椅子を投げてエリザの背中当たってしまします。彼女は脊椎を損傷し、長い闘病生活を余儀なくされました。病床上に伏しながら、自分の身に起こったことを考えるにつけ、彼女の心には少年に対する怒りと憎しみの感情が膨らんでいきました。また、「なぜこんな身になってしまったのだろう。なぜ神様はこの苦しみを与えられたのだろう。」

彼女は悲しみと嘆きの涙の日々で信仰も弱っていきました。

そんなエリザの病室に毎日掃除に来る黒人のおばさんがいました。掃除をしながら、彼女はいつも感謝にあふれて讃美をし、笑顔が絶えません。しかし弱っているエリザは彼女の歌にイライラしていました。「すこし静かにしてくれない。」と思わず言ってしまう。「ごめんなさい。でも、悲しみや嘆きを讃美に変える力を、イエス様がくださるの。」と彼女は言い返した。その夜、彼女は黒人女性の言葉を思い返していると、涙が出てきて、自然と悔い改めのお祈りを神様にしていました。そして彼女の中からあふれてきた詩から生まれたのが「歌いつつ歩まん」です。

私の妻も鼻歌を歌い、歌詞の間違った聖歌を歌い、ピアノで讃美します。いつも喜んでおり、その笑顔は私の喜びです。不思議なことに結婚前の不幸のどん底にいた時も、妻は高らかに讃美していました。私はその讃美に惹きつけられたようです。

3年前の大腸がんの手術の時も、讃美していました。コロナ感染を恐れて診察を避けるクリニックも多い中、毎日多くの人の感染検査をすついに感染してしまいました。子供達の感染が多くなっているのです、そこからものだと思えます。

「もし、恐れ退くなら、わたしのこころは彼を喜ばない。」(38)。恐れず、診察を続けてきている妻は、神に喜ばれていると思います。私には、神からの勲章のような気がします。命懸けで生き、診察をしています。神から与えられた人生、命を惜しんでも、金を惜しんでも、力や富を惜しんでも、神を裏切っているような気がしません。このようにして、私たちの生涯は、これからも営まれていくのでしょうか。それが、「いのちを保つ」秘訣です。